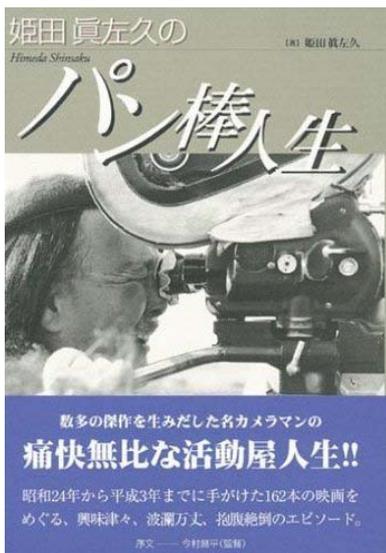


9月例会は「レイルウェイ運命の旅路」

11月19日撮影監督 姫田眞佐久 生誕100年記念上映会予告

加古川出身の映画関係者として誰を思い浮かべるでしょうか。現役の監督、俳優や映画スタッフも活躍しているところですが、撮影監督(カメラマン)の**姫田眞佐久**(1916-1997)のことを知っている人は少なくなっただしょう。現在の加古川市西神吉町で生まれ、武蔵野美術学校を卒業後、大映でデビューしたのち、日活で活躍しました。今村昌平監督や神代辰巳監督らの作品のカメラを担当してきた戦後の日本映画を代表する撮影監督の一人なのです。

今年の11月19日は、姫田撮影監督が加古川に生まれてちょうど生誕100年目の日になります。加古川シネマクラブ内でも、いつかは、関連の行事を行いたいという声もありました。そこで、この日に通常の例会と上映会を合わせた特別上映会として、吉永小百合主演



姫田眞佐久著「姫田眞佐久のパン棒人生」

例会のお知らせ

■名称／第80回例会『レイルウェイ運命の旅路』

■日時／9月15(火) ①PM 2:00ー、②PM 4:20ー、
③ PM 6:40ー

■場所／加古川総合文化センター大会議室(JR東加古川駅から北へ徒歩10分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■受付／入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例

会参加券」をお受取りください。

【例会作品データ】

■タイトル／レイルウェイ運命の旅路

(原題／The Railway Man)

■監督／ジョナサン・テプリツキー

■出演／コリン・ファース、真田広之、ニコール・キッドマン、ステラン・スカルスガルド、ジェレミー・アーパインリテーシュ・パトラ

■データ／013年、オーストラリア・イギリス、116分、ドラマ

■解説／1995年度「エスクエア」誌にて、ノンフィクション大賞を受賞したエリック・ローマックスの自叙伝「The Railway Man」。第二次世界大戦下、日本軍の物資輸送のためのタイとビルマを結ぶ泰緬



鉄道建設は、その過酷な労働で多くの死者を出したことから「死の鉄道」として知られている。捕虜として作業に狩り出された英国人将校エリックが綴った戦争体験と、その後の驚くべき人生を映画化した『レイルウェイ 運命の旅路』は、それが実話であるという事実と共に、魂を根底から揺さぶる感動のヒューマン・ストーリーだ。

一般的に泰緬鉄道に関して知られている知識は、デヴィッド・リーン監督の『戦場にかかる橋』で描かれている程度のもので、作品は傑作ではあるがあくまでもフィクションという位置づけであり、実際に作業員として働き戦禍を生き延びた退役軍人たちにとって真実を伝えるものではなかった。だが、映画に描かれているように、その記憶はあまりにもつらいものであるため、生存者たちはその事実を同じ経験をした者以外には話したがらなかったという現実がある。そんな中、声を挙げたエリックの勇気ある行動、そして妻パトリ

シアの献身的な愛に支えられながら、悪夢に深く関わる日本人通訳・永瀬と対峙するという決断は、エリックにとってどれほどの苦痛と覚悟を強いられたことだろうか。映画で、その瞬間が訪れる時、観客の緊張感はマックスに達し、やがて言葉に尽くすことはできない驚きと感動の嵐に心をかきみだされる。

エリックの勇気ある行動に賛同し、アカデミー賞受賞のコリン・ファース、ニコール・キッドマン、国際派として活躍する真田広之ら豪華キャストが集結。本作が長編4作目となるオーストラリア出身の俊英ジョナサン・テブリツキー監督のもと、高い志を持ってスタッフ・キャストが丸丸となって本作の撮影に臨んだ。『レイルウェイ 運命の旅路』は、「人は憎しみを絶つことができる」という癒しと贖罪の物語である。それは決して過去を振り返るものではなく、戦争が途絶えることのない現代にこそ求められる、普遍性と感動に満ちたメッセージだ。この英国人将校と日本人通訳に起こった実話は、現代を生きる全ての人々が胸に刻むべき物語なのである。（作品ホームページ抜粋）

2015映画大学 in 今治の参加報告

2015映画大学 in 今治(7月18日から20日まで)。年に一度の映画大学。今年は愛媛県今治市で開催されました。初日は台風の影響から、交通網で影響を受けたようですが、その後はまずまずの天候で、今年の映画大学も充実の三日間だったようです。残念ながら、私は二日目のみの参加でしたが、濃い一日でありました。まず講義①**白鳥あかね**さん(スプリクター、脚本家)。スプリクター(=監督補佐、記録係)として、男社会である映画界での奮闘ぶりは興味深く、聞き入ってしまいました。講義のテーマ『スプリクターはストリッパーではありません』は、出版された本のタイトルとおなじです。本を読まれたらこの意味もおわかりですよ。講義②**李鳳宇**さん(映画プロデューサー)。テーマは「私と映画」でしたが、李さんの近況、毎年行っておられるカンヌ映画祭のお話など、楽しく聴けました。ただ、李さんの最新本(四方田犬彦さんとの対談集~民族でも国家でもなく)が、売り切れ(購買部には5冊しか用意してなかったそうです・・・。少なすぎ)、サインをもらえず、唯一の心残りとなりましたが、次回のお楽しみにおきます。講義③**伊藤英明**さん(映画監督)。「映画X年後制作から見てきたこと」についてのお話は、映画『放射能を浴びたX年後』を観ていたの、太平洋核実験の漁船被ばくについての話がよくわかりました。また、実際にお目にか

かると、おやさしい人柄が伝わってきて、映画大学の良さを実感いたしました。おみやげに今治タオルも買って帰り、満足の日でした。(せん)

前回例会の報告

7月23日の例会は、インド映画『めぐり逢わせのお弁当』を鑑賞しました。参加者の評判は「良かった」というものが多かったのですが、参加者は少なかった。暑かったため、インド映画は人気が無いのか、日ごろ見る機会のない作品だけに、少し勿体ない感じがしました。

参加会員98人、明石シネマクラブから8人参加。

明石シネマクラブ例会情報

■名称/『ミンヨン倍音の法則』(2014年、日本、140分)
■日時/10月23日(金) ①PM2:00-、②PM4:30-、③PM7:00-
■場所/アスパシア明石9階子午線ホール(JR明石駅東徒歩5分)
■解説/ソウルで暮らす女子大生ミンヨンは、亡き祖母が遺した1枚の古い写真に心をとらわれている。それは、祖母の親友だった日本人・佐々木すえ子とその家族を撮った戦時中の写真だった。すえ子への思いを抑えきれず日本へと渡ったミンヨンは、そこでストリートチルドレンの少年や何者かに追われるジャーナリストら、多くの人々と出会う。やがて、すえ子がかつて暮らしていた屋敷にたどり着いたミンヨンは、70年の時を超えて戦時中のすえ子の苦難を経験する。

■監督・脚本/佐々木昭一郎

■出演/ミンヨン、ユンヨン、武藤英明、旦部辰徳、高原勇大

■受付/会場受付で、①加古川の会員であることを証明するもの(氏名が記されている例会参加券が送られてきた封筒など)を提示し、②鑑賞希望であることを告げて、③受付簿にサインする

■目的/加古川シネマクラブと明石シネマクラブの交流事業として、映画鑑賞の機会を増やし新入会員を増やそうと、例会に相互参加できるようにしています。

■明石シネマクラブ TEL 090-3860-6662

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

http://homepage3.nifty.com/cinemaclub

会員数150人(7月23日現在)